

環境のオントロジー V

竹 原 弘

はじめに

本稿は「環境のオントロジー」『徳山大学論叢第43号』1995年6月、「環境のオントロジー II」『徳山大学論叢第44号』, 1995年12月「環境のオントロジー III」『徳山大学論叢第46号』, 1996年12月「環境のオントロジー IV」『徳山大学論叢第47号』1997年6月の続編である。本稿は今までの考察に基づいて労働と環境との関係について述べた。労働は人間存在の特異な有り方であり, 社会システムを媒介にして, 世界のために自然を世界の中へ取り込む機能を果たす。労働と言うシステム内の存在構築には, 世界の熱い眼差しが注がれており, システムは自らの中で労働によって生産した商品を世界へと送り, そのことによってシステムから世界へと, 世界からシステムへと貨幣が循環する。労働の存在論的根拠はそこに有る。

本稿は特にマルクスの労働概念を手掛かりにして論を構築したのであるが, マルクスの難解な理論について, 徳山短期大学の稲葉和也氏(経営学)に幾つかの貴重な助言を頂いた。感謝申し上げる。勿論有りうべき誤認識の責任は筆者に有る。

V 労働と環境

(5-1)

労働と環境との関連性について述べる前にもう一度世界概念について確認をしておこう。既に述べた様に世界とは意味の集合態であり, 人間がそれに基づいてその都度の己れの在り方を構築する場である。従って意味の集合態としての世界は, 人間が自らの存在する場であり, その構成契機である意味

に基づいて己れの存在を構築する場であり、あるいは各々が存在運動を為す場である。

意味は相互主観的な物であり、或る意味がどのような存在の仕方を人間に確立させるかは、無数の人間の存在運動の痕跡として規定されているのであり、言わば個々の有意味的存在者の意味はその背後に無数の人間の無数の実存の歴史を背負っているのであり、あるいはそうした人間の存在運動の歴史を背負うことによって、人間の存在運動の媒介としての有意味性を担っているのである。

世界はそうした意味の集合態として、個々の人間にその都度の存在の仕方を贈与することによって、個々人の世界における在り方を規定するのである。つまり人間の世界における存在の仕方は、世界によって制約されているのであり、あるいは言い換えるならば歴史性によって制約されているのである。歴史性とは、我々の立場からするならば、世界による諸々の意味の産出の歴史であり、それは世界から贈与される人間の存在の仕方の変遷の歴史でも有るのである。

またそのことは、自然との関係で言えば、自然の世界化の歴史であると言える。意味の集合態としての世界、人間の存在運動の場としての世界は常に自己増殖を続けて、人跡未踏の自然を人間的世界へと組み込んで来た歴史でもある。あるいは人間の存在と如何なる関係も持たなかった自然を人間の存在の仕方へと適合するように変化させ続けた歴史が人間の歴史であり、つまり自然の意味化が人間の歴史である。

世界の自己増殖による自然の世界化、あるいは自然の意味化によって自然は人間がその存在を確立し得る場へと変化して行った。そうした世界の自然への自己増殖の歴史が現在の環境問題として、この地球上における人間の存在が問われる問題へと為ったのである。

(5-2)

環境問題との関わりにおいて労働の意義を問うのがこの章の課題であるが、

その手掛かりとして、マルクスの労働観を取り上げよう。まずマルクスの主著である『資本論』においてマルクスは労働について次の様に述べている。

「労働はまず第一に人間と自然との間の一つの過程である。すなわち、人間が自然との物質代謝 (Stoffwechsel) を、彼自身の行為によって媒介し、規制し、調整する過程である。人間は自然素材そのものに対して、一つの自然の力として相対する。彼は、自然素材を、彼自身の生活のために使用し得る形態において獲得するために、彼の身体のもっている自然の力、すなわち腕や脚、頭や手を動かす。この運動によって彼の外に有る自然に働き掛け、これを変化させると共に、同時に彼は彼自身の自然を変化させる。彼は、彼自身の自然の中に眠っている潜在能力を発現させ、その諸力の活動を、彼自身の統制に服させる。ここでは、労働の最初の動物的に本能的な諸形態は問題としない。労働者が彼自身の労働力の売り手として商品市場に現われるという状態にたいしては、人間労働がまだその最初の本能的形態を脱ぎ去っていなかった状態は、太古の後景のうちにかくれて、問題とはならない。我々は労働がもっぱら人間にのみ属する場合の形態における労働を想定する。……………」

彼は自然的なものの形態変化のみをひき起こすのではない。彼は自然的なものの中に、同時に彼の目的を実現するのである。彼が知っており、法則として彼の行動の仕方を規定し、彼がその意志を従属させねばならない目的を実現するのである。そしてこの従属は決して孤立した行為ではない。労働する諸器官の緊張のほか、目的に向かって進む意志が注意力として現われ、労働の全継続期間にわたって必要とされる。しかもそれは、労働がそれ自身の内容とその遂行の仕方とによって、労働を魅することが少ない程、従って労働者が労働を彼自身の肉体的及び精神的諸力の活動として享受することが少ないほど、ますます必要とされるのである。」¹⁾

注1) Marx, Karl : *Das Kapital, Erster Band, Buch 1* : Karl Marx Friedrich Engels Werke Bd. 23. Der Produktionsprozess des Kapitals, Dietz Verlag, Berlin, 1972, S. 231f.

マルクス『資本論第一巻』向坂逸郎訳、岩波書店、1977年、231～232頁。

先に述べた様に人間は太古の時代以来自然に関わり続けて来て、自然の中に人間の痕跡を刻み込み続けて来た訳であるが、その仕方を労働と言う。つまり労働とは人間の自然への関わり方の存在論的表現であると言える。世界の自己増殖に依る自然の世界化、あるいは自然の人間化は労働と言う人間の存在の仕方によって為され続けて来たのであり、言わば世界と自然との間の接点には常に人間に依る労働と言う在り方が有ったのである。つまり人間の労働と言う在り方、一つの存在運動が世界の自己増殖の手段であったのである。先のマルクスからの引用の中にも述べられていた様に、労働は自然に関わり、自然素材を人間的な素材へと加工する。そのことによって人間は自然の中に人間的な痕跡を刻み続けて来たのである。

マルクスは、やはり彼の主要な著書『ドイツイデオロギー』の中で自然と人間との関わりについて次の様に述べている。

「たとえば『実体』や『自己意識』にかんするあらゆる『底知れぬほど高遠な著作』が生まれてくる因となった人間対自然の関係という由々しげな問題のごときは、人間の生産力がそれ相応の土台の上で展開するまで人間対自然の『闘争』が存在してきたと同様、音にきこえた『自然と人間との一体性』なるものも産業のなかで昔から存在してき、そしてそれぞれの時代に産業発展の高低に応じて違ったあり方をしてきたことが見抜かれればおのずから崩れてしまう。……………」

フォイエルバッハはたんに自然界のうちにとてつもない変化が生じるのを見るのみならず、また人間世界の全体と彼自身のものを見る力、いやそれどころか彼自身の存在すらもがちどころに消えてなくなるのに気づくにちがない。もちろんその場合、外的世界の先在性に変わりがあるわけではないし、もちろんこれらすべてはもともとの、ゲネラーティオ・エキヴォーカによって生み出された人間には当てはまらないが、しかしこの区別は人間を自然と見るかぎりでのみ意味をもつにすぎない。それにしてもこの、人間的歴史に先行する自然などというものはフォイエルバッハの住んでいる自然でないこと、できたての二つ三つのオーストラリアの珊瑚島のようなところはい

ざ知らず今日ではもうどこにも存在しない自然、したがってフォイエルバッハにとっても存在しない自然であることは確かである。』²⁾

人間は自然を加工し続けて来たのであり、その在り方を一般的に労働と呼ぶのであり、それは自然に人間的痕跡を残すことによって、自然を世界の中に組み込むための人間の存在の仕方である。人間は常に何らかの有意味的存在者へと自らの存在を適合せしめることによって、世界において自らの存在を構築することをその本質としている訳であるが、自然に対峙して、自然に人間的痕跡を残す存在の仕方を労働と呼ぶ。人間の存在構築は常に何らかの意味、あるいは有意味的存在者の意味へと関わることによって為されるのであるが、その場合人間が特定の有意味的存在者の意味へと関わって、自然の中に自分の存在の痕跡を残す存在の仕方を一般的に労働と呼ぶ。

人間の日常的な存在構築は、人間にその都度何らかの意味を与える事によって世界は人間に存在を贈与することによって為されるのであるが、つまり意味の集合態としての世界の中に刻み込まれている無数の人間の過去の存在の痕跡に基づいた存在を人間に贈与するのであるが、労働の場合にはそれと共に、人間の労働と言う存在の仕方を世界が支えているのである。詳しくは後で述べるが、労働と言う在り方は世界によって支えられているが故に可能なのであり、他の日常的な在り方とは根本的に違うのである。つまり人間の労働と言う存在の仕方の背後には常に世界が有り、世界は人間のそうした在り方を期待を持って見つめているのである。労働をすることによって人間は、労働と言う自らの存在構築の成果を絶えず世界へと送り続けて来たのであり、意味の集合態としての世界はそのことによって自らの形態を常に変えて来たのである。つまり世界は、人間の労働と言う在り方の成果を取り込む事により、自らの中に蓄積することによってその形態を維持しつつ、またその形態を替え続けて来たのである。すなわち意味の集合態としての世界を構成する意味は労働と言う媒介によって常に組み替えられて、その結果自ら

2) マルクス、エンゲルス「ドイツイデオロギー」『マルクス、エンゲルス全集第3巻』大内兵衛、細川嘉六監訳、大月書店、1972、39～40頁。

の形態を換え続けて来たのであり、今もそのことは続行され続けているのである。

労働は常に自然に何らかの形で関わり続け、自然の内に有る諸々の物を世界の中へ還元することによって、人間が存在する場としての世界をそれとして維持し、さらに人間が存在する場としての世界を拡大し、あるいは人間の新しい存在の様式を世界の中に導入する。例えば熱帯雨林を伐採して、それを木材資源へと加工することによって、人間の何らかの存在の仕方に適合する様にし、世界における人間の存在の場を形成する。あるいは新しい電気製品を開発することによって、新しい人間の存在の仕方を世界の中に導入する。

そのことは自然の中に人間的痕跡を刻み込まれることによって、自然がどんどんと世界化され続けて来た事と裏表の事態である。環境問題とは言わば自然の世界化の結果生じた事態であり、先のマルクスの著作からの引用にも述べられていた様に、人間的痕跡の無い自然などは一部の例外を除いては存在しない。そうした自然の人間化によって齎らされた自然の様々な歪みが環境問題と言う事態として惹起しているのである。自然は全体としてバランスを保っていて、それ自体の中に有る法則によってその形態を維持し続けて来たのであるが、そこに労働と言う、言わば世界を背景とした人間の在り方を媒介として世界が侵入することによって、そのバランスは崩れ続けて来たのである。先に述べた様に労働が、人間の他の日常的な存在の仕方と異なる点は、それが世界によって支持されていると言う事であり、その存在の仕方の背後には世界の熱い眼差しが有り、労働はそうした世界の期待に答えるために次々と自然的存在者を有意味的存在者へと改良して、世界へと送り続けるのである。そのことによって世界は意味の集合態としての自らの形態を維持し、またそれを人間が存在し続ける上においてより快適な場へと改良するのである。

労働と言う在り方に依る人間の自然への関与の仕方はそうした全体としてバランスを保っている自然の一部へと関わり、他の自然の部分は人間の在り

方において無化されるが故に、自然が有する全体のバランスは崩れる。そしてそうした事態が環境問題として成立するのは、そうした事態が人間の存在を脅かすが故である。つまり環境問題として惹起する問題は自然の在り方の問題ではなくて、自然を環境として、あるいは自然を己れが生存する場として存在している人間の存在に関わる問題だからである。例えば先に例に挙げた熱帯雨林の伐採に関して言えば、熱帯雨林の減少が甚だしい場合に熱帯雨林が吸収する二酸化炭素の量が少なくなるので、地球の温暖化現象に拍車がかかる訳で、そうすると人間の存続に関わる問題になるのである。

意味の集合態としての世界は、先に述べた様に、無数の人間の絶えざる存在運動の場であり、そうした無数の人間の存在運動に依って世界を構成している諸々の意味は世界の構成契機として存続して行き、世界の現在の形態が維持され、あるいは人間の存在の仕方がより快適になる様に世界の形態が改良されるのである。そうした世界は自然界と離れた所に有るのではなく、自然界の様々な影響の下に存続するのであり、もし自然界が何らかの形で人間が生存するのに適さない状態になれば、世界は崩壊せざるを得ない。

(5-3)

再びマルクスから引用して、論述の手掛かりにしよう。

「商品世界の一般的な相対的価値形態はこの世界から排除された等価商品である亜麻布に、一般的等価の性質を押しつける。亜麻布自身の自然形態は、この世界の共通の価値形態 (Wertgestalt) であり、それ故に亜麻布は他の全ての商品と直接的に交換可能である。この物的形態は全ての人間の労働の目に見える肉化 (Inkarnation) として、一般的な社会的蛹化 (gesellschaftliche Verpuppung) としての働きを為す。……………」

このようにして、商品価値に対象化されている労働は、現実的労働のすべての具体的形態と有用な属性とから抽象された労働として、たんに否定的に表示されるだけではない。それ自身の肯定的性質が明白に現われるのである。それは、全ての現実的労働を、これに共通な人間労働の性質に、人間労働の

支出に約元したものである。』³⁾

「商品を使用価値として見る限り、私がそれを今、商品はその属性によって人間の欲望を充足させるとか、あるいはこの属性は人間労働の生産物として得るものであるとかいうような観点のもとに考察しても、これに少しの神秘的なところもない。人間がその活動によって自然素材の形態を、彼に有用な仕方に変えるということは、真昼のように明らかなことである。例えば材木の形態は、もしこれで一脚の机を作るならば変化する。それにも拘らず、机が木であり普通の感覚的な物であることに変わりはない。しかし机が商品として現われるとなると、感覚的にして超感覚的な物に転化する。机はもはやその脚で床の上に立つのみではなく、他の全ての商品に対して頭で立つ。そしてその木頭から狂騒を展開する。それは机が自分で踊りはじめるよりはるかに不思議なものである。』⁴⁾

人間存在が労働と言う在り方によって自然物を加工して、それを商品化する事はマルクスの言う様にそれに使用価値を与えるのであるが、そのことを我々の表現で述べると、自然物を人間存在が自らの在り方を構築するための媒介と為り得る様に変形すると言う事である。

今引用したマルクスの文章の後の方は『資本論』の第一巻第一章第四節「商品の物神的性格とその秘密」の冒頭の文章であるが、周知の如くマルクスに限らず、マルクスが影響を受けたスミスやリカード等、マルクスが彼の様々な著作の中で批判する、国民経済学派も商品の価値を使用価値と交換価値とに区別するのであるが、ここではそうした経済学の専門的な問題には深入りしない。ただ広松渉が、著書『マルクス主義の地平』の中でこの問題について論じている部分を引用しておこう。

「マルクスの分析によれば、誰しも憶えている通り、商品は、さしあたってはまず『その諸属性によって人間の何らかの欲求を充足しうる有用物』と

3) Marx, Karl: *Das Kapital, Erster Band, Buch 1.* S. 87.

マルクス『資本論第一巻』88頁。

4) Marx, *Ibid.* S. 85.

マルクス、同書、94頁。

して使用価値であり、『交換価値の物的な担い手をなす』。ところで、『交換価値は、さしあたり、或る種類の使用価値物が他の種類の使用価値物と交換される量的な関係、比率として現象する』が、この現象的事実それ自体が、交換される両商品が『或る第三者に等しい』ことを物語っている。交換される『両商品はそれが交換価値たる限り、この第三者に還元されるものである筈である』。この共通の第三者、それが『価値』にほかならない。

この第三者、価値とは何であるか？ この『価値』から商品の物神的性格があらわれる。

価値という『この共通者は、諸商品の幾何学的、物理学的、化学的、その他、いかなる自然的な一属性でもない』。従って、個々の商品をどうひねりまわしてみたところで、価値としては依然として把握不能のままである』。けだし、商品の自然的・物的・感性的な属性が問題になるのは、当の属性が商品を有用物たらしめ、よって使って使用価値たらしめる限りにおいてであるが、価値対象性はまさしくこの使用価値の捨象において存立する。しかもこの『捨象』たるや、頭のなかでの、単なる論理的な操作としての捨象ではなく、相異なる使用価値をもった異端の商品を共通な第三者——これはいかに抽象のレベルを高めても使用価値としては断じて共通ではなく飽くまで異質である！——と等置するという交換が即自的に措定する『捨象』——『日々現実におこなわれている抽象』である。』⁵⁾

マルクスは商品の価値はそれが労働の対象化であるが故であると述べており、労働を具体的労働と抽象的労働の二つに分類するのであるが、様々に異なる労働の成果である商品が交換され得る根拠を抽象的労働と言う概念でもって説明する。先に引用した最初のマルクスの『資本論』からの文は抽象的労働に関して述べた部分である。ついでにやはり抽象的労働について述べた部分を引用しよう。

「これらの私的労働は他方において生産者達自身の多様な欲望を、全てのそれぞれ特別に有用な私的労働がすべての他の有用な私的労働種と交換され

5) 広松渉『マルクス主義の地平』勁草書房、1983年、222～223頁。

得る限りにおいて、従ってこれと等一であるものとなる限りにおいてのみ、充足するのである。toto coelo（全く）違った労働が等しくなるということは、それが現実に不等一であることから抽象されるばあいのみ、それらの労働が人間労働力の支出として、抽象的に人間的な労働としてもっている共通な性格に約元されることによつてのみありうるのである。私的生産者の脳髓は、彼等の私的労働のこの二重な社会的性格をただ実際の交易の上で、生産物交換の中で現われる形態で反映するのである。すなわち——従って彼等の私的労働の社会的に有用な性格を、労働生産物が有用でなければならず、しかも他人に対してそうでなければならないという形態で——異種の労働の等一性の社会的性格を、これらの物質的に違った物、すなわち労働生産物の共通な価値性格の形態で反映するのである。』⁶⁾

要するに多様な労働の具体的な形態によって生産された商品を相互に通底する事柄は、ここでマルクスが言う抽象的労働であり、それは多様な形態の具体的労働を含む労働の共通性の事である。各々の商品がこのような共通項を持っているが故に、人々は商品相互を交換することが可能なのであり、すなわちそのことが商品が商品たる所以なのである。

(5-4)

こうしたマルクスの理論に基づいて我々の立場から考えるならばどのようなであろうか。我々の今までの論述は存在論的な立場からの論述であつて、勿論経済学の領域内での議論ではない。それ故に先のマルクスの議論の領域の中に入って行く事はしない。ただマルクスの言う商品とは何か、と言う事を明確にすることは我々の論述において必要な事であり、そのことを明確にすることによつて労働と言う事存在論的な性格付けが明らかになると思うので、先に述べた様にマルクスから長々と引用をしたのである。

労働者は商品を生産するとマルクスは言う。商品は本質的に他の商品と、

6) Marx, Karl: *Das Kapital, Erster Band, Buch I.* S. 87.
マルクス『資本論第一巻』97頁。

あるいはもっと日常的には貨幣と交換されるために生産される訳であるが、それが交換される根拠をマルクスは抽象的労働に求めた。つまり抽象的労働の結果と言う共通項を各々の商品は持っているが故に商品は交換可能なのである。我々はそれを人間の存在の共通性に求めよう。つまり人間存在が様々な商品を生産し、それを販売して、そのことによって得た利益で別の商品を購入する訳であるが、つまり世界において多様な商品が行き交う訳であるが、それはそれらの商品が全て人間存在が世界の中において、何らかの存在を構築する際にその媒介の働きを為すが故である。すなわち商品とは、それが人間存在にとって、彼が世界の中で何らかの存在を構築する際にその媒体となる限りにおいて商品で有り得るのである。つまり全ての商品は人間存在の存在に何らかの形で適合して、人間存在が存在構築の場としての世界において何らかの存在を構築する媒体と為るのであり、その限りにおいて商品たり得るのである。それ故に市場において多様な商品が貨幣を媒介として交換されるのである。多様な商品はそれぞれ全く異なる意味を有しており、それら様々な商品を使用することの目的は様々であり、その限りにおいてそれらは如何なる共通項も持たないのであるが、それらが人間存在が何らかの存在を構築するための媒体と言う共通項を持っている限りにおいて、それらは人間存在にとって有意味的なのである。

そして労働とは、自然的素材を加工して、そのように人間存在が自らの世界の中での存在を構築する媒体とする事である。労働者はそのままでは単なる物体でしかない物を、人間存在が何らかの形で自らの在り方を構築する媒体となりうる存在者、つまり有意味的存在者へと変える事を為す。つまり労働者は意味の集合態である世界の中に様々な有意味的存在者を送り込むために絶えず自然物を有意味的存在者へと変形する作業を為す。世界とは既に述べた様に意味の集合態として、人間存在がそこにおいて常に何らかの存在を構築する場であり、ハイデッガー流に言えば開けであり、人間へと存在が送られる場である。しかし人間存在へと存在を送るのは世界であり、存在その物と言った神秘的なXではない。意味の集合態としての世界は、そこに自ら

の存在の根を下ろしている人間存在に対して存在を贈与し、またその都度の存在の仕方を贈与することによって、人間存在が世界の構成契機である様々な意味へと関与することを為さしめ、そのことによって世界の形態を維持し、あるいは人間存在へと送り得る存在をもっと多様にするために新しい意味を産出する。新しい意味の産出は具体的には様々な企業や大学等の研究機関によって開発され、企業によって生産される事を通してであるが、構造的には世界が為すのである。⁷⁾従って労働者に依る労働は言わば世界の要請によって為される行為であり、自然体を加工して、人間存在がそれを媒介にして世界の中で自らの何らかの存在を構築し得る媒体へと変えて、それを世界の中へ送り込む事によって、世界の中での人間存在の存在構築の仕方をより多様にする。つまり先にも述べた様に労働者は世界からの熱い期待の眼差しの下に労働をするのであり、その結果としての生産品を世界へと常に還元するのである。

従って労働の存在論とは、労働することによって世界において人間存在が自らの存在を構築するために、あるいは存在構築をより多様に、そしてより容易に為し得るために、世界と言う場において人間存在が自らの存在構築をするための媒体としての有意味的存在者を送り込むための特異な存在構築の仕方を論ずる事である。

労働の産物を一般的に商品と言うが、商品とは我々の立場からの表現で言えば有意味的存在者であり、商品と言う表現を使う場合にはそれが市場における交換の対象である場合である。市場での一般的には貨幣と交換する行為は、経済学の領域では利潤の追求のためであると言う事になるが、それは存在論的には世界への意味の定着を促す行為であり、人間存在の存在の錯綜態である世界においてより多くの、より容易な存在確立の仕方の可能性を拓くため世界が作用するのであると言う事になる。マルクスの言う抽象的労働の結実された物が商品であり、交換価値を有する物であるが、商品は市場で交換されることによって初めて商品と為るのであり、それに対して有意味的存

7) 詳しくは拙著『意味の現象学』ミネルヴァ書房、1994年、第四章第四節を参照。

在者と表現される場合には、それは必ずしも交換されなくても良い。つまり有意味的存在者はそれが人間存在の存在構築を可能にする限りにおいて有意味的存在者であるのであり、それは人間存在の存在運動の普遍性にに基づいている限りにおいて市場において交換され得るのである。

労働の過程で生産する商品は、人間存在の存在の仕方の構造に基づいて生産される。つまり或る商品が何らかの形で人間存在が自らの存在運動を世界の中で展開する過程でその媒体となる限りにおいて、あるいはその商品が人間存在の存在に適合する限りにおいて、それは商品で有り得るのである。またそれが商品として生産され、市場において流通するのは、或る程度人間存在の存在運動に普遍的に適合する必要がある。つまり何らかの有意味的存在者が或る特定の人間存在の在り方に適合するが、それ以外の人間存在の存在には適合しない場合には、それは商品として市場に出す事は出来ない。例えば誰かが趣味で、レオナルド・ダ・ビンチが何百年前に作り、自らがその実験台になった様な飛行機を制作したとすれば、それは飛ぶ事が出来ないが故に人間存在一般の存在構築の媒体と為る事が出来ない。それ故にそうした飛行機を商品として生産することはありえず、或る好事家の趣味の範囲を超える事は無い。それでは人間存在の存在構造に基づいて商品は生産されると言う事はどういう事なのか。世界は既に何度も述べた様に意味の集合態であるが、そのことは言い換えると、世界は無数の人間存在の存在運動の痕跡の蓄積であると言う事である。無数の人間存在が何千年と言う歴史的過程で無数の存在運動を行なって来たのであり、世界を構成している諸々の意味はそうした過去における無数の人間存在の無数の存在運動の痕跡であり、それらが様々な有意味的存在者として残っているのである。従って経済学的な表現を使えば商品であり、存在論的な表現を使用すれば意味、あるいは有意味的存在者である諸々の世界構成体は過去の無数の人間存在の存在運動の痕跡として、或る明確な形を持った物として、新たな人間存在の存在運動を可能にする媒体として、もしくは世界をそうした人間存在が自らの存在を構築する場として自らを開く事を可能にする、世界を世界たらしめる世界の構成態とし

て有るのである。

従って労働することによる商品、あるいは有意味的存在者の生産とは、そのままでは単なる物体でしかない自然体に手を加えて、人間存在が世界において自らの存在を構築するための場を世界の中で確保するための媒体へと変形することである。

そのことを近代の哲学者ヘーゲルは彼の著作の中で次の様に述べている。

「諸々の特殊化された欲求を満たすのに適した、同じく特殊化された手段を作製し獲得する媒介作用が労働である。労働は自然によって直接に提供された材料を、これらの多数な目的のために、極めて多種多様な過程を通して種別化する。だからこの形成は手段に価値と合目的性を与えるのであって、その結果、人間が消費において関わるのは主に人間の生産物であり、人間が消費するのはこうした努力の産物である。」⁸⁾

(5-5)

商品、あるいは有意味的存在者が何らかの形で交換されることによって、何らかの形で誰かの存在運動の媒体となること、もしくはそれが世界の中に定着して人間存在が自らの存在を構築する媒介となることのためには、それが市場へと出る事、つまり利潤追求のための人間相互の関わりの中へ入って行かなければならない。

「マルクスは、次のように自問自答します。『労働生産物が商品という形態をとるや否や生ずる……この謎めいた性格はどこから生ずるのか?……商品形態においては、人間的労働の相等性が労働生産物の相等な価値対象性という物象的な形態をとり、人間的労働力の支出の時間的継続による度量が労働生産物の価値の大きさという形態をとり、……生産者たちの諸関係が労働生産物の社会的関係という形態をとる。』『商品という形態の秘密にみちた在り方は単に次の点にある。すなわち、商品形態は、人びとの目に、彼ら自身の

8) Hegel, W. F. : *Grundlinien der Philosophie des Rechts*, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1955, S. 173.

労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として、これらの事物が自然物として具えている社会的属性として反映させ、従ってまた、総労働に対する生産者たちの社会的関係を彼らの外部にある対象物の社会的関係として映ぜしめるという点にある。』『この倒錯視 Quidproquo によって、労働生産物が——感性的でしかも超感性的な、乃至は社会的な、事物——商品になるのである。……ここで人びとの目に物と物との関係という幻覚的な形態をとって現われるものは、人びと自身の一定の社会的関係たるにほかならない。……商品世界では、人間の手の生産物が、固有の生命を賦与され、相互間に、そしてまた人間とのあいだに、関係を結びあう自立的な形態であるかのように仮現するのである。』⁹⁾

マルクスは商品の価値、つまり商品が商品として市場に出る事が出来るのは、商品が人間の抽象的労働の結実した物であるが故であると述べ、我々の立場から有意味的存在者が商品として市場で貨幣と交換されるのは、それが普遍的に人間存在に適合するが故であると述べたのであるが、我々の立場、すなわち存在論の立場からするならば、そうした市場での商品の、あるいは有意味的存在者の交換が生ずるのは、意味の集合態としての世界の自己増殖、あるいは世界が自らの中により多くの存在の場を確保するための作用であるということになる。世界は、既に述べた様に、常に人間存在が存在構築するための自らの場を拡大し、より豊かなものにしようとするのであり、そのために常に新たな意味を自らの中に確保しなければならない。その作用が労働であり、市場においての有意味的存在者を広く多くの人間存在の存在へと接続させる事である。そして商品、あるいは有意味的存在者はその場合に、マルクスが言う様に使用価値ではなくて、交換価値を獲得しなければならない。そのことは我々の存在論の立場からするならば、その有意味的存在者が、人間存在が世界の中において自らの存在構築をするための媒体となり得るということの世界が承認するという事である。つまり世界がその商品、あるいは有意味的存在者の有する普遍的な存在性格を受け入れると言う事であり、

9) 広松渉『物象化論の構図』岩波書店、1983年、171～172頁。

言い換えれば世界の構成契機としての意味を日常的な生活形態の中で維持し続けている無数の人間存在が自らの存在運動の中でその有意味的存在者の存在性格を受け入れたということである。

(5-6)

世界の要請に応じて人間存在に労働と言う在り方を構築せしめる働きを為すのが社会システムである。社会システムは個々人の労働と言う在り方と世界を媒介する作用を為す。社会システムとは先に述べた様に、¹⁰⁾ 複数の人間存在がそれぞれの役割を遂行することによって全体としてのシステムの機能に関与する様な或る全体性であり、それは意味の集合態としての世界に基づいて、関与する意味領域を限定する。社会システムはそれ自身が機能するために世界から様々な意味を特定の領域へと集合せしめて、複数の人間存在が特定の場において共に労働することを可能にする。つまり社会システムはマルクスの言う協働 (Zusammenwirken) を可能にする。人間存在は諸々の意味へと関わることによって世界において何らかの存在を構築する存在者であるということについては既に何度も述べたが、そうした人間存在が社会システムに内属されることによって、その社会システムが世界から集合せしめた、そのシステムが機能するための諸々の有意味的存在者へと関与することによって、労働と言う在り方を構築するのである。

社会システムはそれが機能してその世界での役割を遂行するために、その機能のために世界から諸々の有意味的存在者を特定の場に集合せしめているのであるが、そこに内属している様々な人間存在は、各々がそのシステムを機能させるために、それらの意味へと関わることによって労働と言う存在を構築する。そのようにしてシステムの中で構築した存在に基づいてシステム内の諸々の人間存在は、同じシステムに帰属する他の人間存在との間に関係性を形成する。システム内にそのように形成される諸々の関係性は、システムを形成する様々な意味へと己れの存在を関わらせることによって構築する、

10) 拙稿「環境のオントロジー」『徳山大学論叢第43号』1995年6月参照。

システムの機能に即した労働と言う在り方に基づいて形成される。システム内におけるそうした諸々の人間存在相互の関係性は、常に全体性としての社会システムへと最終的には還元される関係性である。

マルクスは有名な「フォイエルバッハにかんするテーゼ」の中で次の様な人間の定義をしている。

「フォイエルバッハは、宗教性を人間性へと解消する。しかし人間性は個人に内在する抽象物ではない。その現実性においてはそれは社会的諸関係の総体である。」¹¹⁾

我々はこのマルクスが言う社会的関係をシステム内における意味と捉える。つまり何らかの社会システムに帰属する人間存在はその社会システムが自らの中に組織した意味に関わる事によって、同じ社会システムに帰属する人間存在や、それ以外の社会システムに帰属している人間存在との間に何らかの関係性を形成する中で労働と言う在り方を構築する。社会システムに帰属する人間存在は、そのシステムが自らの中に集合せしめている諸々の有意味的存在者の意味に自らの存在を適合せしめることによって、労働と言う存在を構築する訳だが、その人間存在の在り方、存在そのものはシステムが自らの中に保持する意味の総体によって成り立っており、それがシステムに即した関係性を形成するのである。その人間存在がシステムの外において、つまりそのシステムが自らの存立の基盤としている世界に存在している場合には、世界を構成する意味へと自らの存在を関わらせることによって、その都度の存在を世界の中で構築する訳だが、その人間存在が社会システム内において何らかの在り方を構築している場合と違って、システムがその人間存在に割り当てた役割から開放されており、従って彼の存在運動は組織立っていない。つまり彼がシステムを離れて世界の中で何らかの存在を構築する場合には、彼の存在運動が世界の中に生み出す差異は恣意的であり組織立っていない。世界は意味の集合態であり、諸々の人間存在はそうした意味へと関わ

11) マルクス、エンゲルス「フォイエルバッハにかんするテーゼ」『マルクス、エンゲルス全集第3巻』4頁。

ってその都度の存在を構築しているのであるが、その存在運動はシステム内でのそれと比べると恣意的であり、組織的ではない。人間存在は世界の中で何らかの社会システムに帰属している場合が多いが、システムから離れると、その存在構成は場当たりの場合が多い。人間存在はマルクスが言う「社会的諸関係の総体」であると言う場合に、我々の立場からするならば「社会システムの諸関係の総体」であると言う事になる。人間存在が世界を構成する意味の集合態へと関わり、その都度の己れの存在を構築することを学んだのは、その人間存在が何らかのシステムへと帰属することによってである。

メルロ=ポンティが言う様に「我々の身体は空間や時間の中に住み込んで」¹²⁾おり、世界の中に住み込んでいる事が出来るのは、あるいは我々の今までの表現を使えば、我々が我々の周囲に有る諸々の意味へと自らの存在を適合せしめることによって、その都度の存在を構築することが出来るのは、その多くの部分をシステムから学んだからである。つまり学校と言うシステムに何年かの間帰属することによって、我々は様々な意味へと己れの存在を適合することを学んだのである。

そのように人間存在は意味の構造的集合態としての社会システムへと帰属することによって、自らの世界の中における存在の仕方を学んだのであり、その意味において人間存在は社会システムの諸関係の総体なのである。

(5-7)

社会システムにおいて諸々の人間存在は組織的に集められて、組織的に配置された意味の構造的集合態へと常に関わる事によって労働と言う在り方を確立しつつ人間相互の関係性を形成して行く。社会システムにおいては個々の人間存在はシステム内での関係性の一つの項であり、その存在意義は彼が何らかの関係性の中の一つの項である限りにおいてである。

「さて労働における自己の生の生産にしても、生殖における他人の生の生

12) Merleau-ponty, Maurice: *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, Paris, 1945, p. 163.

産にしても、およそ生の生産なるのものはとりもなおさず或る二種の関係として——一面では自然的関係として、他面では社会的関係として——現われる。ここで社会的というのは、どのような条件のもとであれ、どのような仕方においてであれ、そしてどのような目的のためであれ、ともかく幾人かの諸個人の協働という意味である。したがって、或る特定の生産様式または社会的段階と結びついているということ、——そしてこの協働様式はそれ自身、一つの『生産力』である、——人間たちの利用しうる生産力の総体は社会的状態を条件づけ、したがって『人間の歴史』はつねに工場および交換の歴史とのつながりのなかで研究され論じられねばならぬということになる。』¹³⁾

マルクスの言う協働とは、我々の表現ではシステムが形成する関係性の中の一つの項としてシステムと言う或る全体のために他者と共に労働と言う存在を構築することである。その前提として他者と共にシステム内に帰属している、意味の構造的集合態を共有することが必要である。協働するということは、システムが自らの中に集合せしめた意味の構造的集合態へと共に関わるということであり、そのことによって共にシステムという全体へと還元し得る存在をシステムにおいて構築することである。

既に時間とは人間存在が、自分の現在の構成契機である或る有意味的存在者への関与から離脱して、自分の新しい存在を構築するために新たな有意味的存在者へと向かう存在運動であり、そうした人間存在の絶えざる脱自性に基づいて世界に生み出される差異であると述べた。¹⁴⁾ すなわち時間性とは常に新たな意味へ向かって絶えず新たな存在を構築しようとする人間存在の存在運動である。そしてここでの協働とは、複数の人間存在がシステム内に組織的に配置された意味の構造的集合態へと己れの存在を絶えず関わらせることによって、絶えず世界を差異化するその仕方が体系的であり、複数の人間存在のシステム内の意味の構造的集合態へと関わることによって世界へと産

13) マルクス、エンゲルス「ドイツイデオロギー」『マルクス、エンゲルス全集第3巻』25～26頁。

14) 拙稿「環境のオントロギー III」『徳山大学論叢第46号』1996年12月参照。

出する差異化の系列が最終的に一つの予め規定された目的へと収斂して行く様な形で形成される, そうした時間性を特徴とする。従って協働とは, 意味へと関わって己れの存在構築を為す人間存在が相互に同一の目的へと向かって存在運動を為す, その仕方であり, 存在の仕方である。一般的に人間存在が世界の中で自らの存在運動の過程で構築する存在が向かう方向性は予め決定されておらず, 各々の存在運動に委ねられているのであるが, つまり主体としての各々の人間存在の存在が向かう方向性に任されているのであるが, 社会システムにおいて為される協働と言う存在の仕方の場合には, 各々の人間存在が自らの存在を構築するその仕方は, あるいは自らの存在構築が目論む世界の差異化の仕方は, 各々の存在に委ねられているのではなくて, 社会システムが予め細部に渡るまで規定しているのであり, それ故に各々が行使する時間性は, つまり世界への差異の導入の仕方はシステム全体へと差異化が収斂する様に規定されている。

協働はシステム内に形成された人間相互の関係性に基づいた在り方であり, 各々は関係性の中で自らの役割を与えられていて, その役割を遂行することが体系的に世界の中に差異を導入することである。関係性の一つの項である各々の人間存在の時間性の行使としての世界の中への差異の導入は, 関係性全体による差異の導入へと, つまり商品の生産へと繋がって行き, 関係性全体としての社会システムの世界における機能へと収斂して行く。個々の人間存在はシステム内の意味の構造的集合態へと関わることによって労働と言う己れの存在を構築することによって, 同じシステムに帰属して, システム内の意味の構造的集合態を共有している他者との協同によって最終的にはシステムへと還元される存在運動を為す。協働とは従って各々の在り方が相互に通底していなければならない, それは同一の意味の共有によって可能となる。各々が各々の時間性を行使して世界の中に絶えず差異を生み出す存在運動がシステムによる有意味的存在者, あるいは商品の生産に繋がるためには, つまり各々の人間存在が世界の中に生み出す差異が相互に繋がっていて, その連続性が何らかの商品の生産へと収斂するためには, システム内において各々

が自らの存在を関与せしめることによって存在を構築して、商品を生産するための意味の構造的集合態が同一でなければならず、それへと関与することによって確立する存在が相互に関連していなければならない。協働が成立する根拠は従って意味の共有であり、そのことによる存在運動の連動性である。

そしてシステム内で共に労働と言う在り方を構築している人間存在が、システム内の諸々の意味へと関わることによる自らの未来を到来せしめるその仕方は、システム外において世界の中で諸々の意味へと関与することによって未来を到来せしめる仕方とは異なる。世界において〈私〉の現在を構成している或る有意味的存在者へと〈私〉の存在を関与させて〈私〉の現在を構築している在り方から離脱して、別の有意味的存在者へと関わることによって〈私〉の存在へと到来せしめる〈私〉の未来は、現在の〈私〉にとって未定であり、〈私〉の存在へと到来すべき〈私〉の未来は〈私〉にとって不透明である。しかし〈私〉が何らかのシステムへと帰属していて、何人かの他者との協働において到来せしめる未来は〈私〉の存在が有する時間性に依存してではなくて、〈私〉の存在が関わる意味の構造的集合態を共有している他者と共に、システムによって予め決められている未来を到来せしめることになる。だから〈私〉の存在が何人かの他者と共に直面するであろう未来は、システム内の意味の構造的集合態へと共に関わることによって、システム内に帰属することの中でシステムが決定していた未来である。例えば或る商品を生産するために〈私〉が何人かの人達と協働する際、〈私〉がシステム内に配置された意味の構造的集合態へと〈私〉の存在を関与させて構築する〈私〉の存在と、〈私〉と協働する人達の存在によって〈私〉達へと、あるいはシステムへと齎られる未来は予めシステムによって描かれた未来、つまり幾つの商品を生産するかと言ったシステムが計画した未来である。その際に〈私〉や〈私〉と共に協働した他者達の存在に到来する未来は、既に協働する以前にシステムによって規定されていた事態であり、幾つの商品を生産するかと言った、システムが世界の要請によって決定して計画的に到来せしめようとしていた未来である。従ってシステムに帰属して、その中の意

味の構造的集合態へと自らの存在を適合させることによって到来せしめようとする未来は、〈私〉と言う独自の存在の決断によって到来せしめる未来ではなくて、それ故に透明な、あるいは既に規定された未来である。

(5-8)

既に述べた様に社会システムは世界の要請によって商品を、あるいは我々の表現では有意味的存在者を生産する。世界は意味の集合態として、自らの中に帰属している多様な意味を保持し、さらにより多様化せしめることによって人間存在がそこで各々の存在を構築する場をより豊かに、より容易にしようとする。そうした世界の要請によって社会システムは商品を生産して、それを世界へと定着せしめる努力をする。社会システムはそのように、常に意味を自らの中に保持し、かつさらに意味を増殖しようとする世界のために商品を生産する社会的装置である。従ってシステム内で、そこに内属する意味の構造的集合態へと常に己れの存在を関与せしめて労働と言う存在をシステム内に構築している人間存在は、システムによってその存在が規定されているのであるが、しかし既に述べた様に労働と言う在り方が世界が自然へと自らを拡大していく手段である訳であり、それ故にシステムはそうした世界の自然への拡大の手段としての労働と言う在り方を世界の中に確立して、それを組織立った形において世界の中に存続させるための装置である。

システムは自らの中に労働と言う在り方を組織して、それをシステムティックに機能させるのであるが、そのことによって世界を自然へと拡大させることによって自らの中に含む人間存在の場、開けをより増大させようとする。世界が自らの中に含む意味が増大するならば、人間存在が己れの存在構築する場、あるいは開けが増大して行く。つまり世界の構成契機としての意味、もしくは有意味的存在者はそれらが世界の構成契機として、世界の中で或る場を占めることによって、人間存在の自らの存在構築の場を開けるのであり、人間存在にその存在を贈与するのである。例えば何も存在しない空虚な空間の中に巨大なビルを建設することによって、それまでは人間存在が自らの存

在を構築する上において無意味な場であったその空間に人間存在が自らの存在を構築する場を開けるのであり、人間存在にその空間における存在を贈与するのである。

システムはそのように世界の要請によって商品を生産し、さらに生産した商品を世界の中に定着させるために広く商品を世界へと拡散せしめて、その商品、あるいは有意味的存在者によって人間存在が世界の中で構築する場を拡大する。それがシステムによる商品の販売である。

(5-9)

マルクスは『哲学の貧困』の中で貨幣について次の様に述べている。

「貨幣は一つの物ではなくて、むしろ一つの社会的関係である。貨幣と言う関係が、他の全ての経済的関係、例えば分業等と同様に一つの生産関係である……」¹⁵⁾

我々は一般的に商品を貨幣と交換することによってその商品を法的に自分の所有物とするのであるが、その場合に貨幣はシステムが生産した商品、あるいは有意味的存在者の交換価値を計る一つの基準となる。

マルクスは『資本論』の中でも貨幣について述べている。

「諸商品は貨幣によって通約し得る物になるのではない。逆である。全ての商品は価値として対象化された人間労働であり、従ってそれ自体として通約し得る物であるから、その価値を同一の特殊な商品で共通に測り、このことによってその商品をその共通の価値尺度、または貨幣に転化し得るのである。価値尺度としての貨幣は、商品の内在的な価値尺度である労働時間の必然的な現象形態である。」¹⁶⁾

マルクスは貨幣は、彼の言う抽象的労働の対象化した物であり、すなわち

15) Marx, Karl, Engels, Friedrich : *Marx, Engels Werke, Bd. 4. Das Elend der Philosophie*, S. 107.

マルクス「哲学の貧困」『マルクス、エンゲルス全集第4巻』107～108頁。

16) Marx : *Das Kapital, Marx, Engels Werke Bd. 23. S. 109.*

マルクス、エンゲルス『資本論第一巻』123頁。

商品の有する交換価値を測定する基準であると述べている。システムが生産した商品、あるいは有意味的存在者を世界へと定着させるための一つの原動力と為るのがこの貨幣である。購買者にとっては貨幣は商品を購入するという存在構築のための有意味的存在者であり、購買者は貨幣と言う意味へと己れの存在を関わらせることによって商品を購入するのであるが、その場合に購買者は自分が所有する貨幣のみに自らの存在を関わらせるのではなくて、貨幣と言う意味を媒介として商品を販売する他者と関わるることによって初めて購入したい商品を手に入れる事が出来るのである。従って貨幣は購買者の欲望の、つまりその商品を購入したいという欲望の一つの象徴であり、あるいは欲望の体现である。そして貨幣を支払う商品購入者にとって商品販売者は、自分の欲望、つまりその商品を購入したいという欲望を実現するための迂回路であり、商品購入者はその商品を手に入れるためにはその商品を現在所有している購買者と貨幣と言う欲望の象徴を媒介にして関わる必要があるのであり、その関わりは多くの場合には人間相互の関わりではなくて、相互の人間存在は互いに自分の欲望の迂回路でしかない。つまり販売者は自分の商品を購入者へと販売することによって、その購買者が商品と引き替えに自分に支払ってくれるであろう貨幣を手に入れる事によって自分の利益を得るという欲望を満ちし、また購入者は販売者は彼にながしかの貨幣を支払ってその商品を手に入れるための迂回路でしかなく、欲望実現のための手段でしかないのである。そこに生ずる関係は従って、カントの倫理学における倫理的命題、つまり「汝は汝の人格においても他人の人格においても、人間性を常に同時に目的として用い、決して単なる手段として用いない様に行為せよ」¹⁷⁾と言う命題に反する事態が生ずる。

それでは何故人々は貨幣を使って商品を購入するのだろうか？ ここで我々は存在欲望と言う新しい表現を使おう。存在欲望とは何らかの有意味的存在者へと自らの存在を関わらしめることによって、その有意味的存在者を介し

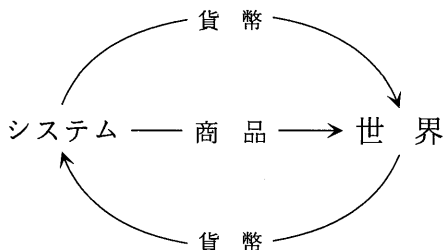
17) Kant, Immanuel: *Kritik der praktischen Vernunft*.
カント「実践理性批判」『カント全集第7巻』理想社、1980年。

て自分の存在を構築しようとする欲望である。人間存在が様々な形で何らかの商品が何らかの社会システムによって生産されて、それが市場において販売されることを知って、それを購入したいという欲望に駆られる場合、その欲望とはその人がその商品によって世界の中で何らかの存在を構築したいという欲望である。例えば〈私〉が新しいCDプレイヤーを購入したいと言う欲望に駆られる場合、〈私〉はそのCDプレイヤーと言う有意味的存在者に自らの存在を関与せしめる事によって、音楽を聴くと言う存在を世界の中で構築したいが故である。そうした存在を構築するために〈私〉はそのCDプレイヤーを購入したいのである。そのために〈私〉は貨幣を使ってそのCDプレイヤーを購入することによって自らの欲望を満たす。その場合に〈私〉がそのCDプレイヤーを購入するために使用する貨幣は〈私〉にとってどのような存在なのであろうか。〈私〉はそのCDプレイヤーを購入するための貨幣を何らかの労働によって得た訳であり、つまり〈私〉の何らかの形で、何らかの社会システムにおいて為した労働によって得た収入によってそのCDプレイヤーを購入しようとするのである。その場合、〈私〉のCDプレイヤーを購入したいという存在欲求は〈私〉による労働で得た貨幣によって充足する訳である。従って貨幣とは〈私〉の欲求を充足させるための手段であり、〈私〉の存在欲求は〈私〉による労働によって得た収入としての貨幣によって満たされるのである。現代においては貨幣は万能であり、貨幣によって我々はあらゆる物を得る事が出来る。従って我々は個々の商品、あるいは有意味的存在者を獲得する以前にまず貨幣を得たいと思うのであり、貨幣を媒介にして我々はあらゆる商品を獲得する。それ故貨幣は我々の存在欲求の象徴であり、その体現化されたものであると言える。個々の商品、個々の有意味的存在者への欲求以前に我々が貨幣への欲求を持っているのであり、それは我々が有するあらゆる存在欲求が一般化されたものであり、その象徴にはかならない。つまり我々のあらゆる存在欲求の殆どは貨幣によって充足するのであり、従って我々は個々の商品への欲求以前に貨幣への欲求を持っているのである。

そのあらゆる人間存在のあらゆる存在欲求の象徴である貨幣は世界の中であらゆる有意味的存在者を動かしている。システムが生産して、販売することによってあらゆる有意味的存在者は世界の中に定着して、世界を構成する契機となるのであるが、そのことはあらゆる場合において貨幣を介して為される。人々は貨幣を介して様々な商品を購入することによって、それを世界を構成する一契機と為す。あらゆる人間存在は貨幣を介してあらゆる商品を購入することによってそれらを世界の中に定着させ、それらを世界の構成契機とする。すなわち貨幣は世界の中をそのように飛びかう事によってあらゆる有意味的存在者を世界の中に定着させるのである。従って貨幣は人間存在のあらゆる存在欲求の象徴であり、またあらゆる意味を世界の中に定着させる原動力である。貨幣の力によってあらゆる有意味的存在者は、それを生産したシステムを離れて世界の中に定着するのである。人間存在による貨幣を介してあらゆる有意味的存在者を購入するという存在運動によって、あらゆる有意味的存在者は世界の中に定着するのである。それは人間存在の存在欲求によって支えられ、そうした欲求に基づいて貨幣は世界の中を飛びかい、意味を世界に定着させることによって意味の集合態としての世界をより豊かにするのである。

それではシステムにとって貨幣とはどのような意義を持っているのであろうか。システムは商品を生産し、さらにそれを販売することによって商品世界の中に定着せしめる。その際にシステムは貨幣を世界から得る。つまりシステムは自らが作った商品を世界へと散布することによって、世界から貨幣を獲得する。システムの機能は商品を生産し、それを販売することによって世界へと定着させ、世界における人間存在が存在を構築する場をより豊かにし、より容易にすることによって、その代償として世界から貨幣を獲得する。システムがそのようにして世界から獲得した貨幣は、その一部を労働者へと、彼等のシステム内での労働の代償として配分される。貨幣を獲得した労働者はシステムを離れて、世界を構成する一人の人間存在として世界の中に立つ時に、そのように獲得した貨幣によって市場に出回っている別のシス

テムによって生産され、販売されている商品を獲得した貨幣で購入する。そのように貨幣はシステムを介して再び世界へと帰還する。すなわち貨幣はシステムが生産した商品の代償として、世界からシステムへと移行し、さらにシステムに属する労働者によってシステムから世界へと帰還する、と言う様にシステムと世界の間を循環する。図で表現すると次の様になる。



すなわち貨幣はシステムが生産した商品が世界へと移行して、世界の中に定着すると反対にシステムへと移行し、そしてまた世界へと帰る、と言った循環運動を繰り返すことによってシステムが生産する商品を世界の中に定着させる力となる。そのような貨幣の循環は人間存在の存在欲求の一つの現われであり、人間存在は何らかのシステムで労働することの代償として何らかの貨幣を獲得し、それを使用することによって何らかの商品、あるいは有意味的存在者を獲得して、自らの存在欲求を充足せしめる。従って労働と言う存在構築の根拠はそのような貨幣の循環であると言える。つまり貨幣を獲得して、それによって何らかの商品を獲得すると言う人間存在の存在欲求が人間存在を何らかのシステムへと帰属せしめて、そこにおいて労働と言う在り方を構築せしめるのである。そうした人間存在の存在欲求がそのように貨幣を世界からシステムへ、システムから世界へと循環せしめるのであり、従って労働者がシステム内での意味の構造的集合態へと己れの存在を適合せしめて労働と言う存在を構築するのは、意味の世界への定着のためであり、それは貨幣の世界とシステムとの間の循環のためである。すなわち貨幣は人間存在の存在欲求の体現であり、あらゆる人間存在の存在欲求は貨幣への欲求

として現われるのであり、それは貨幣を世界から自分が属するシステムへと呼び寄せる欲求として現象する。従って労働者がシステム内で労働と言う存在を構築するのは、そのように貨幣を世界からシステムへと呼び寄せて、自らの存在欲求を充足させるためであり、あるいは貨幣を世界からシステムへ、さらにシステムから世界へと循環させるためである。

(5-10)

ここで再びマルクスを引用しよう。

「したがって、意識はそもそものはじめからすでに一つの社会的産物なのであり、およそ人間達が存在する限り、社会的産物であることを止めない。」¹⁸⁾

マルクスによれば人間存在の意識は常にその時代の社会に何らかの形で規定されているのであり、なまの意識、あるいは純粹な意識などは存在しない。そうしたマルクスの論を手掛かりにして我々の意識についての考え方を展開しよう。

既に述べた様に、¹⁹⁾人間存在の時間性は意味へと関わることによって何らかの存在を構築している現在から、現在を構築している契機である何らかの意味から離脱して、別の意味へと関わることによって、現在は過去へと移行し、未来が到来するのである。そしてそうした意味への関わり、それからの離脱と言う存在運動によって人間存在は世界の中に常に差異を生み出して行く。そして世界の開示は〈私〉が何らかの意味へと関わる事によって現在を世界の中で構築している、その〈私〉の存在に対して為されるのであり、そうした〈私〉に対して世界は自らを現象せしめ、それ以外の形で世界が〈私〉に対して自らを現す事は無い。その際に〈私〉は、〈私〉の現在を構成している何らかの有意味的存在者へと〈私〉の存在を関わせしめることによって開示される世界のみが唯一の世界であるとは思っていない。例えば〈私〉が狭い部屋の中に居て何か書き物をしているとすると、その場合に〈私〉は目

18) マルクス「ドイツイデオロギー」『マルクス、エンゲルス全集第3巻』26頁。

19) 拙稿「環境のオントロジー III」参照。

の前に有る原稿用紙、あるいはワープロ、パソコン等へと自らの存在を関わらしめることによって〈私〉の現在を構築しているのであるが、その場合にその〈私〉の現在に対して現われる世界は狭い部屋の光景だけであるが、〈私〉はそれだけが唯一の世界であるとは思っていない。それは〈私〉の現在には常に〈私〉の過去が付きまとっていることの何よりの証左である。何故ならば〈私〉はその場合に、特定の過去を想起している訳ではないにも拘らず、〈私〉が何らかの有意味的存在者へと自らの存在を関わらしめることによって〈私〉の現在に対して現われる世界のみが唯一の世界ではなく、世界はその狭い部屋を超えて無限の広がりをもっていることを知っているのである。そのことは特定の事柄を想起していないにも拘らず、世界の無限の広がりをもつ〈私〉に知らしめている〈私〉の過去が〈私〉の現在に現前していると考え以外に説明のつかない事柄である。つまり〈私〉は常に何らかの有意味的存在者へと己れの存在を関わせしめることによって、世界の中で己れの存在を構築するのであるが、そうした〈私〉の存在に対して世界は開示され、その開示された世界には常に〈私〉の過去が付随しているのである。つまり〈私〉の世界における何らかの存在構築には常に〈私〉の過去が、〈私〉の存在構築の背景として〈私〉の存在に付きまとっており、〈私〉はそうした背景を常に背負って現在を構成しているのである。だから〈私〉の現在に対して開示される世界は〈私〉の過去と言う背景に基づいて〈私〉の存在に対して自らを顕わにするのである。そしてそのように常に過去を自らの存在によって開示される世界の背景として、自らの存在の基盤として携えながら、〈私〉の存在はさらに常に未来へと向かっている。つまり〈私〉の存在は常に何らかの有意味的存在者への関わりによって世界の中で構築している現在を乗り越えて、それを過去へと追いやる事によって未来を自らの存在へと到来せしめる存在運動を為しているのである。あるいは〈私〉の存在構築としての現在を常に崩して、新たな有意味的存在者へと向かい、新しい現在を構築することへと向かう。つまり〈私〉の存在はそのように過去を背負いつつ、何らかの有意味的存在者へ存在論的関わりの中で世界を開示して、

それに基づいて未来へと、あるいは新しい有意味的存在者へと向かう事によって現在からの離脱を図っているのである。

意識とは、我々の立場からするならば、そのように過去を背負い未来へと向かう現在であり、つまり何らかの有意味的存在者へと自らの存在を関わらせることによって〈私〉の現在を構築することによる世界の開示態にはかならない。そしてそうした世界の開示態としての〈私〉の意識は、マルクスが言う様にデカルト的な純粋なコギトではなくて、常に何らかの有意味的存在者への関わりとして、自らが関わることによって現在としての存在を構築しているその有意味的存在者によって規定されているのである。世界を構成する意味の集合態は時代的な制約を受けていて、時代によって変化し、それに基づいてそれらの意味の集合態へと関わる人間存在の存在構築の仕方でも時代によって変化するし、さらにそうしたことによって世界を開示させるその仕方でも時代の制約を受ける。それでは時代の制約とはどのようなものであろうか。人間存在は常に自らの周囲に存在する世界の構成契機としての様々な有意味的存在者へと自らの存在を関わらせしめることによって、その都度の己れの存在を構築することによって己れの現在を形成している。そしてそうした自らの現在を常に崩して新たな現在を構築すべく新たな有意味的存在者へと向かうことによって現在を自らの存在の中で、自らの存在によって追越し、現在を過去へと追いやり、新たな有意味的存在者への関わりによって未来を自らの存在へと到来せしめる。そうした人間存在の存在運動によって人間存在は日常的な在り方を形成しているのであるが、そうした存在運動は当然の事ながら、世界を構成する意味の集合態によって大きく規定される。そして世界の構成契機としての意味の集合態は時代と共に変化し、それに伴って人間存在の存在運動の形態も変化する。人間存在の存在運動が時代と共に変化していくならば、当然それに基づく人間存在の意識の形態も変化していくであろう。50年前には日本にはまだテレビなるものは存在していなかったが故に、当時の日本人がテレビと言う有意味的存在者へと自らの存在を関わらせることによって、テレビを見ると言う存在を構築するということはある

かった。テレビを見ると言う在り方は言わば情報を視覚的に受け取る事であり、その場合に当然のことながら情報はビジュアルであり、ラジオからとか新聞から受け取る情報と比べてより具体的な形で情報が得られる。少なくとも50年前の日本ではそのようにテレビと言う有意味的存在者へと己れの存在を関わらせて、テレビを見ると言う存在を構築することが出来なかった訳であり、すなわち言い換えればテレビと言う有意味的存在者へと己れの存在を関わらせて、自らの存在を構築する現在、あるいはテレビと言う有意味的存在者へと関わる事によって開示させる世界はありえなかったのである。つまりその当時人間存在が構築する存在が構成する現在において、それが引きずっている過去にも、また彼が到来させようとする未来にもテレビと言う有意味的存在者は無かったのであり、つまりテレビと言う有意味的存在者を契機とする存在構築、世界の開示はありえなかったのである。

現代人の意識と古代、あるいは中世の人々の意識の違いの最も著しい事は、時間意識であろう。現代人はその殆どが時計を持っており、時計が刻む時刻を自分の存在運動の一つの基準としている。つまり現代人は何らかの意味へと己れの存在を関わらせることによって構築する存在運動を、時計と言う有意味的存在者への関わりによって常に測定しつつ行なう。既に述べた様に、時間性とは人間存在が諸々の意味へと己れの存在を関わらせて構築する存在運動であり、それに基づいて世界の中に産出する差異であるが、そうした事自体は測定基準というものを本質とはしない。何故ならばそうしたことは自己に固有の有り方に関する問題であり、客観的にそれを測定することがそのことから必然的に出て来る訳ではない。つまりそうした人間存在の多様な存在運動は何らかの基準によって測定されなければ生起しない訳ではない。ところが歴史的な過程において多様な意味が世界によって、あるいは世界において産出されることによって、他者との協働が社会システムの中で必然的な事柄となって来ると、個々人にとって固有であった存在運動としての時間性は、他者の存在運動と通底し得る基準を設定することによって互いのそのような時間性としての存在運動を調整する必要が生じて来た。現代人は己れの

存在運動を常に、それを測定する基準である時刻を考慮し、あるいは測定機械である時計を常に参照しながら為す。現代人のその都度の有り方は常に時計を慮って為され、常に後何時間の余裕が有るとか、もう時間的余裕が無いとか言いながら、己れの存在運動を時計によって調整する。ところが古代人や中世人は現代人の様に正確な時間基準によって己れの存在運動を為してはいなかった。彼等にとって時間はゆっくりしたものであって、また差異を生み出す存在運動は彼等に固有なものであり、それを他者の存在運動と調整する必要もあまり無かった。彼等の意識は現代人の様に常に時間的に差し迫り、追い立てられる如きものではなかった。

そのような時間性の違いによって、開示される世界も異なったものになるだろう。現代人にとって、例えば旅をする場合、新幹線の窓から見える景色は目的地へと向かう通過点でしかなく、開示された世界は出来るだけ早く通過すべき通り道であり、重要なのはどれだけ早くその場を通過するかであって、その通過の過程でその都度開示される世界はそれほど重要ではない。目的の場所へと行く過程において開示される世界が持つ意味は出来るだけ早くそこを通り過ぎるべき場所と言った意味でしかない。古代人や中世人にとってそのように開示された世界はそれ自身何らかの意味を持つものであり、彼等は現代人である我々の様に先を急ぐ必要もなかったし、またそのことが可能でもなかったが故に、世界は彼等にそのことを要求することもなかった。それ故彼等は旅の途中で開示される世界を己れの存在運動に対して独自に開示された世界としての意味を付与し、それを眺める事を楽しんだ。

このように世界を構成する意味が違えば、それによって構築する存在も違うものになるし、開示される世界も違ったものになる。そのように人間存在の意識は時代的制約を受ける、それ故に純粋な意識などはありえないと言うマルクスの考えは承認しても良いだろう。

(5-11)

労働者は既に述べた様に、システム内の意味の構造的集合態へと自らの存

在を適合せしめることによって、労働と言う存在をシステム内に構築するのであるが、その場合の労働者の意識は先に述べた様に、労働者が関わっている意味によって規定されている。すなわち労働者の労働と言う存在運動が生み出す差異はシステムティックであり、それは労働者の存在の自由に委ねられているのではなくて、労働者の存在が関わっている意味の構造的集合態によって規定され、さらにシステム内の諸々の有意味的存在者はシステムが生産する商品によって規定されている。

労働者が労働する存在論的根拠は先にも述べた様に、システム内で生産された商品を世界へと拡散させることによって世界へとそれらの商品を定着されることであり、それは貨幣の循環、すなわちシステムから世界へ、世界からシステムへの貨幣のそのような循環によってシステムが生産した商品は世界へと定着するのである。つまり貨幣がそのようにシステムから世界へ、世界からシステムへと移動することによって、商品はシステムから世界へと動き、世界の中へと定着して、世界における人間存在の存在の場をより豊かにして、世界の形態を維持したり変化させたりするのである。労働とはそのように貨幣をシステムから世界へと循環させる一つの契機であり、労働によってシステム内において商品は生産され、それは貨幣との交換によって世界へと定着するのである。

そしてシステムは労働者の労働と言う存在構築をシステム内において為した結果としての商品を世界へと拡散させることによって、世界から貨幣をシステム内に集合させなければならない。システムの使命は出来るだけ良質の商品を生産して、それを世界へと拡散せしめて、世界の構成契機である有意味的存在者をより豊かにすることである。そのことの代償としてシステムは世界から貨幣を集合せしめて、貨幣の循環を可能にする。システムは自らの中で商品を産出するために、諸々の有意味的存在者を自らの中へと集合せしめて、意味の構造的集合態を自らの中に形成する。システム内の意味の構造的集合態は商品を産出するための手段であり、労働者はそうした意味の構造的集合態の中に組み込まれて、それらに自らの存在を関わらせることによ

て、システム内についての独自の空間図式を形成して、システム内における自らの時間性の行使としての差異の産出をシステムティックにする。労働者はそのように自らの時間性をシステムによって規定された形で行使することによって、自らの存在へと到来せしめる未来をシステムによって規定されている。システムは自らの内に組織化された協働の形態を形成して、そのようにシステムティックに未来を労働者の協同存在へと到来せしめるのである。

労働者の意識はその場合に、システムを構成する意味の構造的集合態によって規定される。労働者はシステム内に組織された意味の構造的集合態へと己れの存在を適合せしめることによって己れの現在を構築し、それに基づいて世界が開示されるのであるが、その開示された世界は、労働者が彼の存在を適合せしめている意味の構造的集合態によって規定されており、そして彼がそうした有り方に基づいて到来せしめようとする未来はシステムによって規定された未来であり、開示された現在の中に到来すべき未来は素描されているのである。すなわち彼のシステム内での存在運動は、彼の存在が関わるシステム内の意味の構造的集合態によって大きく規定されていて、彼の存在運動が世界の中へと産出する差異はシステムティックに配置されている意味の集合態に基づくのであり、従って産出される差異は、あるいは世界を差異化する仕方はシステムの全体性において規定されている。つまり労働者が労働と言う有り方をシステム内に構築することによって産出する差異の行方はシステムによって規定されており、従って彼がシステム内の意味の構造態へと自らの存在を適合せしめて開示する現在は彼の存在の現在であるよりもむしろシステムの現在であると言える。つまりそのようにして構築した彼の存在の現在は、彼自身の脱自性に基づくと言うよりも、あるいは彼の自由なる時間性の行使によって形成されたと言うよりは、システムによって計画された現在である。マルクスの言う労働の疎外とは、今言った様な意味において理解されるべきであろう。マルクスは有名な『経済学・哲学草稿』において労働の疎外について次の様に述べている。

「労働者の、彼の労働の産物に対する有り方は何か他人のものにたいする

ごとき有り方であるという規定のうちに、これらすべての帰結が含まれている。けだしこの前提からして明らかなことは、労働者が身をすりへらして働けば働く程、彼が自分に対抗したもとして作り出すところの余所ものの対象的世界がますます強力なものになり、彼自身、彼の内面的世界がますます貧しくなり、彼自身に属するものはますます少なくなるということだからである。宗教においても同様である。人間が神のうちへ置き入れるものが多ければ多い程、彼が自己自身のうちにとっておくものはますます少なくなる。労働者は彼の命を対象の中へ置き入れるが、そうすると、それは彼のものではなくて、対象のものである。従ってこの活動が大きければ大きい程、それだけ労働者は対象をもたなくなる。彼の労働の産物であるところのものは彼ではない。従ってこの産物が大きければ大きい程、それだけ彼はますます彼自身ではない。労働者は彼の産物の中で自己を外在化するが、このことの意義はただたんに彼の労働が一つの対象、一つの外的な存在になるところにあるだけでなく、彼の労働が彼の外に、彼とは独立に、余所ものとして存在し、そして彼に貸与した命が彼に余所ものとなって敵対してくるところにある。』²⁰⁾

マルクスは以上の様に労働の疎外について述べているのであるが、彼は結局労働者が所謂生産力を所有しない事がこのような労働の疎外を引き起こす原因であると主張するし、そうした初期資本主義社会の分析が彼の生涯の課題であった。しかし我々の立場から考えるならば、彼の言う労働の疎外は先に述べた様に、労働者が諸々の有意味的存在者へと己れの存在を関わらせることによって構築する労働と言う有り方が、存在論的に労働者の固有な存在に根ざしていないと言う事であり、それはシステムが世界へと商品を拡散することによって貨幣をシステムから世界へ、世界からシステムへと循環させる事にその根拠を持つと言う事になる。そのためにシステムは世界からの要

20) Marx, Karl: *Ökonomisch-philosophische Manuskripte (1844)*, Marx, Engels Werke, *Ergänzungsband*, Dietz Verlag, Berlin, 1973, S. 512.

マルクス「経済学哲学草稿」『マルクス、エンゲルス全集第40巻』大月書店、1975、432頁。

請によって、世界を構成する意味をより豊かにして、意味へと関わって己れの存在を世界の中で構築する人間存在の存在の仕方をより豊かに、より広くするために人間存在が自らの有り方を構築する媒体としての有意味的存在者を生産して、世界へと送る事を続ける。システムはそのために世界を構成する有意味的存在者となる商品を生産し続けなければならない、システム内での労働者の労働と言う存在構築をシステム全体へと還元する様に、労働者の差異の産出を規制し、時間性の行使を規制する。

(5-12)

そのようにシステムによって労働者は己れの存在運動を規制されるが故に、彼等に関わる空間も同じ様に規制される。労働者による空間への意味付与の仕方は、当然の事ながら彼の存在運動としての時間性によって規定される。例えば東南アジアで伐採した熱帯雨林を材料にして紙を生産するパルプ工場で働く労働者は、パルプ工場と言うシステム内に配置された意味の構造的集合態へと関わることによって構築する自らの存在が構成する現在において開示される世界において見いだすのは材料としての木材であり、そして彼の存在運動の連鎖が形成して行くのは、それを材料にして紙へと加工して行くと言う未来を自らの存在へと到来せしめることである。そうした彼の存在運動において、彼の存在に関わるのはシステム内の意味の構造的集合態と材料としての木材であり、それが何処で伐採されたのか、あるいはその結果はどのような状態なのか、と言った事は彼にとって無化されている。つまり彼がシステム内で構築する存在の連鎖としての彼の存在運動が開示する世界にはただ目の前に有る巨大な材木の塊のみである。彼にとって東南アジアの原始林は、彼がシステム内で構築する彼の存在運動において関わりが無い空間であり、彼が帰属しているシステムが彼に贈与する存在運動は彼にそのような空間への関わりを為させないのである。彼にとって重要なことは材木を材料にして紙を生産して、それを世界において諸々の人間存在が何らかの有り方を構築する媒体にする事であり、つまり世界の中へと人間存在の存在運動の媒

体となる有意味的存在者を送る事である。

つまり彼のシステム内における存在運動において彼が関わる自然は、生の自然ではなくて、既にシステムによって意味付与された自然なのである。システム内存在としての彼にとって自然とは、彼がこれから己れの存在運動によって向かうであろう巨大な材木の塊であり、それは彼にとってはシステムによって与えられた紙の材料と言う意味しか持たないのである。自然それ自体などと言うものは存在しないのであり、それはあたかもカントの言う物自体の様なものであり、知る事の出来ないものである。世界は我々にとって常に何らかの意味へと己れの存在を関わらせて己れの存在を構築することによって構成する現在へと開示されるのであり、その場合に、我々は常に何らかの意図の下に自然を見、世界を見ているのである。つまり自らの時間性の行使としての世界の中に差異を産出する人間存在の存在運動は、それが労働を為すと言う有り方として構築されると、常にシステムによって規定されるのであり、そのような人間存在の存在運動としての時間性が空間性へと反映して、時間性の行使としての差異化作用の連鎖としての存在運動が己れの差異化を刻み込まない領野は、空間的に無化される。すなわち先の例を再び取り上げるならば、熱帯雨林の伐採の場合に、それに携わる労働者の時間性の行使としての差異化作用は熱帯雨林の伐採に限られ、その結果生じる熱帯雨林の中に生息している様々な生命体や、樹木を伐採した結果に生ずるその場所の環境的荒廃等は、伐採に携わる労働者にとっては無化されるのである。つまりそのような差異化作用の連鎖によって結果として生ずる様々な影響は彼等の存在には見えない現象なのである。

「従って我々の複数-生態学的宇宙は、全てが物理学的・化学的・気象学的・植物的、動物的存在、人間的、社会的、経済的、テクノロジー的、イデオロギー的構成要素の間で行なわれる無数の相互作用から出発して組織されているような世界なのである。

ご覧の様に、とりわけ我々の社会を含めた社会は、地球-生態-人間的実体であり、とりわけ現代の生態系を含めた生態系は人類-社会-生態系なもの

である。純粋な自然などもはやない。そして純粋な社会も存在したためしかなかった。』²¹⁾

E. モランが言っている様に純粋な自然、自然そのものなどは今では何処にも存在しないし、今までも存在したためしかなかった。我々が何となく眺める自然は、例えば山であったり、川であったり、海であったり、草原であったり等々であるが、そうした自然は眺める、あるいは観察する人間存在の有り方に応じて様々な形態へと変化自在に変わるのである。生物学者にとってそうした自然は様々な生物が生命を維持している場であり、何となく眺めている自然の中には様々な生物の生存のための様々な葛藤が存在するのであり、そうした事は何となく自然を眺める目には映らない。ただ生物学者として世界の中で、あるいは何らかのシステムの中で己れの存在を構築し続けて来た人間存在の目にのみ映る自然の或る相貌なのである。物理学者にとってはそうした自然はもっと抽象的な法則性として映るであろうし、古生物学者にとっては何万年前の地層の中に埋もれている化石が問題であろう。それらのどれが本当の自然、あるいは自然そのものなのか？ 自然は既に述べた様に、自然を見る人間存在が世界の中で構築している存在に対してその姿を現すのであり、あるいはその人間存在がそれまで世界の中で構築して来た存在に基づいて確保した自然を見る見方、つまり自然へと関わる存在の仕方に応じてその姿を現すのであり、そうした自然以外に自然は何処にも無いのである。

何らかのシステムに帰属することによって、そこにおいて労働と言う存在を構築する労働者としての人間存在にとって自然とは、これから加工すべき何らかの素材であり、あるいは何処かの川に巨大なダムを建設しようとする何処かの建設会社と言う社会システムに属する人間存在にとって川は、そこにおいて巨大なダムを建設すべき場所であり、あるいはダムを建設することによってそこに流れる大量の水を利用すべき場所としての意味を有する。前

21) Morin, Edgar : *La méthode 2, La Vie de la vie*, Edition du Seuil, 1980, p. 76f.

に述べた様に、²²⁾人間存在のみが何らかの有意味的存在者が持つ意味を変更せしめることが出来るのであり、そのことは主体としての人間存在の恣意的な存在変更に基づく場合も有るが、彼が属しているシステムによってその意味を変更せざるを得ない場合も有る。川をダム建設の場としての意味を付与することは、システムが為す事であり、そのシステムに属する人間存在はそのシステムに属していて、その仕事に携わる限りにおいてそうした川の有する意味を変更せざるを得ないのである。そこにダムを建設するということは世界の要求であり、その要求をそのシステムが引き受けたのであり、そこにダムを建設することによって電力を生産し、それを世界へと送り、電気を使用することによって様々な存在を構築する場を開発する世界の要求に答えたのである。しかしそうした何らかのシステムに属する人間存在は、既に述べた様に、己れがシステム内で構築する労働と言う存在運動に基づく差異の産出が齎らす過程における労働者への世界の開示には、ダムを建設するための川として意味付与された自然以外には自然は存在しないのである。自然としての川は、その周囲に住む人々にとっては魚釣りをしたり、夏には泳いだりする場であるが、そこにシステムがダムを建設することによって、そこに住んでいた人々はダムの建設の結果、彼等の村がダムの底に水没するために、川のそうした意味を剥脱される。そこにダムを建設するシステムに属する労働者にとって、以前からそこにそのように住んでいた人々がそこでの日常生活の中で川に付与した意味を見る事は許されず、システムに属する限りは川を、ダムを建設する場としての意味においてしか見ないのでなければならない。つまりシステムから贈与された、そこにダムを建設するという存在を構築する場合には、ダム建設以前の川と言う自然の持つ意味、つまりそこに昔から住んでいた人々がそこに住むと言う有り方の中で自ずと川と言う自然を生活の中に取り入れる事によって、川に付与した意味をそこに見る事は出来ないのである。つまりシステムから贈与されたダムを建設するという存在運動における差異化の過程では、川をそのように見ると言う有り方を構築する

22) 「環境のオントロジー」参照。

ことは無いのであり、あるいはそのような川についての意味付与は己れの有り方の中から排除しなければならないのである。何らかのシステムに属する人間存在はシステム内において構築する存在に基づいてのみ自然を見るのであり、その存在はシステムによって与えられた存在であり、従ってシステムが規定する存在に基づいてのみ自然を見、自然に意味付与せざるを得ないのである。労働者がシステム内の意味の構造的集合態へと己れの存在を関与せしめることによって、形成する存在運動は既に述べた様に、システムによって規定されている訳であるが、そのことによって己れの存在を関与せしめる自然もシステムによって規定されているのであり、それ以外の意味において、あるいはそれ以外の自然に関わる事は許されないのである。従って何らかのシステムに属している労働者の場合には、科学者の場合と違って、彼等が属するシステムが見る様に自然を見、システムが意味付与する様に自然に意味付与するのであり、また自然へと関わるための存在運動もシステムの意味の集合態へと己れの存在を適合せしめることによって、つまりシステムによって規定された形で為されるのである。労働者にとって自然とは言わばシステムによってヴェールをかけられた自然であり、そのヴェールを通してしか自然を見る事は無い。そのヴェールとは意味のヴェールであり、それはそのシステムに属する労働者の自然への存在論的関与を全てにおいて規定するのである。従って彼等はシステムが生産する商品に関わりの無い自然には目を向ける事は無い。システムが熱帯雨林を伐採することによって、その熱帯雨林の中に住んでいた無数の生物が死ぬと言う生態系的な問題に目を向ける事は無い。そうした熱帯雨林の中に住んでいた何万匹の虫やその他の生命体の生命に関しては、システムが熱帯雨林を伐採して、それをパルプ工場へと送ると言う一連の協働としての存在運動には関わりの無い事柄であるからである。つまりシステムによって規定された一連の差異化の運動にとっては、そこで生存している無数の生命体は関わりの無い事柄であり、システムが伐採と言う一連の差異化を刻む熱帯雨林の消滅の結果としてそこに生息していた無数の生き物が死滅するのである。

それでは何故労働者はシステムによって規定された通りに自然を見なければならぬのだろうか、あるいはシステムが規定した通りに自然を見る事を為すのであろうか。自然科学者の場合には、大学と言うシステムに属している場合も有るが、彼等が自然を見る場合には彼等の存在の来歴に基づくのであり、彼等が属するシステムによって規定される前に彼等が世界の中で構築し続けて来た科学者としての有り方によって自然を見る様な有り方を彼等の存在の中に刻印しているのである。従って科学者の場合は彼が属する何らかのシステムに規定されているよりも、彼の存在の来歴によって規定されている場合の方が多いためである。

労働者の場合、既に述べた様に、システムによって規定された労働と言う有り方は自然界への世界の侵入として、自然を世界化する世界の作用を担っているものであり、つまり自然界の様々な物を世界において人間存在が己の存在を構築するための媒体へと変形して、それを世界へと常に送り続けて意味の集合態としての世界をより豊かにする使命を世界によって委託されているのである。労働と言う存在構築の根拠は貨幣のシステムから世界へ、世界からシステムへの循環を為すことによってシステムが開発して生産した商品を世界へと送り続けて、世界の要求に答える事である。すなわち労働と言う有り方の背後には世界の要求が有るのであり、労働者はそれに答えるために常にシステムによって規定された労働と言う存在をシステムの中で、システムによって規定されながら構築し続けるのである。

(5-13)

今までの論述の成果に基づいて我々の立場からの歴史観を述べよう。その場合にやはりまずマルクスの歴史観を参考にして、次にハイデッガーの歴史観を参考にしよう。まずマルクスであるが、彼の有名な『共産党宣言』の冒頭に彼は次の様な歴史観を述べている。

「これまでの全ての社会の歴史は階級闘争の歴史である。自由民と奴隷、貴族と農奴、同職組合の親方と職人、要するに、抑圧する者と抑圧される者

とは、常に対立して、時には隠れた、時には公然たる闘争を絶え間なく行なってきた。そしてこの闘争はいつでも社会全体の革命的改造に終わるか、あるいは合い闘う階級の共倒れに終わった。」²³⁾

このことについてケン・モリスンは次の様に述べている。

「マルクスは、社会の歴史的発展は本質的に経済的である傾向が有ると言う、彼のテーゼを確証するであろう証拠へと彼の関心を向けた。彼は、四つの異なった段階、あるいは時代、すなわち部族の、古代の、封建的な、そして資本主義的生産様式として表現出来るであろうと彼が考えた異なった所有形態としての歴史を考えつく事へと進んだ。」²⁴⁾

マルクスはその時代の社会が所有する商品を生産する力に応じて支配、被支配の形態が異なり、社会の生産力の増大に応じて支配形態が変化して行くと述べ、それが歴史であるとした。

またハイデッガーは、彼の主著である『存在と時間』の中でやはり歴史について次の様に述べている。

「現存在の歴史性の分析は、この存在者が《歴史の中に居る》が故に《時間的 (zeitlich)》であるのではなく、むしろ逆にその存在の根底において時間的であるが故に歴史的に実存し、また歴史的に実存することが出来るのであるということを示そうと試みる。」²⁵⁾

ハイデッガーは現存在、つまり人間存在の時間性に基づいて歴史性が可能であると述べている。

この二人の思想家、哲学者の歴史観は我々に歴史観についての大きな示唆を与えてくれる。我々の歴史観については以前にも述べた事が有るが、²⁶⁾ここでは労働との関連で、前に述べた事を踏まえて再び歴史について述べよう。

23) マルクス、エンゲルス「共産党宣言」『マルクス、エンゲルス全集第4巻』大月書店、1972年、475～476頁。

24) Morrison, Ken : *Marx Durkheim Weber*, SAGE Publications, London, 1995, p. 40.

25) Heidegger, Martin : *Sein und Zeit, Martin Heidegger Gesamtausgabe Bd. 2*, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1977, S. 498.

26) 拙稿「環境のオントロジー III」参照。

既に述べた様に、人間存在は己れの存在を何らかの有意味的存在者へと適合せしめることによって、その都度の己れの有り方を世界の中に構築するのであり、そのことは時間論的に言えば、或る意味への適合によって構築した己れの存在を、あるいはその存在によって開示された己れの現在、あるいは世界を常に崩して、別の意味へと向かうことによって新たな存在を構築し、常に現在を乗り越えて、それを過去へと置き去りにする。そのことによって自らの存在を常に差異化し、また世界を差異化する。ハイデッガーが言う様に、そうした人間存在の時間性が歴史性の根拠であり、歴史性はそうした時間性に基づいて成立するのである。つまり人間存在は常に現在を追い越すことによって、現在の中に差異を導入して新しい現在を構築し、それをまた差異化させることによって追い越すと言った事を繰り返すのであるが、そうした人間存在の時間的な存在の広がりやの延長線上に歴史性が成立する。歴史性とはそうした人間存在の存在の差異化、そしてそれに基づく世界の差異化によって成立するのである。過去を振り返る事は無数の人間存在の無数の差異化を世界に刻印したことの確認であり、己れが現在ここに存在していること、あるいは存在している仕方と過去の或る時代での存在の仕方との間に出来た差異を見る事であり、現在と過ぎ去った時との間の差異の確認であると言える。

そうした自己の存在の中への差異の導入、それに基づいて世界を差異化することにより、現在を絶えず過去へと追いやり、また未来を自己の存在へと到来せしめる事の延長線上に歴史性が成立する。人間存在のそのような時間性の行使、絶えざる自己の現在の追越しによる日常性の構築は毎日繰り返されるのであるが、そうした繰り返しの中に次第に差異が導入されて、差異化の差異化が為されて、日常性の中での差異化の繰り返しそのものが差異化されていく。先に述べた様に、自己の存在の中に差異を導入することと意味との間には密接な関連性が有る。己れの存在の構築は常に何らかの有意味的存在者へと己れの存在を関わらせることによって為されるのであり、その存在を崩して別の有意味的存在者へと己れの存在を関わらせる事によって新たな存在を世界の中に構築することが自己の存在を差異化させることであり、世

界の中に差異を導入することであるが、自己の存在が関わる有意味的存在者が今までの自己の存在運動の連関の中には無かった物であるならば、つまり自己の日常性の中に新しい意味が導入された場合には、差異化の繰り返しとしての日常性そのものが差異化されて、新しい差異化の様態が形成されることになる。例えば今までの生活の中には無かったコンピューターが生活の中に導入されることによって、それまでの差異化の繰り返しそのものが差異化される。

新しい有意味的存在者の世界の中への定着により、世界を構成する意味連関は大きく変動して、それに伴ってそうした意味へと己れの存在を関わらせることによって日常性を形成する人間存在の存在運動の形態にも変化が生じて、差異化の繰り返しとしての日常性そのものが差異化されて、日常性の形態に変化が生ずる。そうした世界を構成する意味の集合態の連関の変化は、個々の人間存在の差異化の延長線上において生ずるのであり、また個々の人間存在の有り方としての労働によって生ずるのである。労働の形態は既存の、世界を構成する意味の集合態、つまり世界に基づいて有るシステムを構成する意味の構造的集合態に基づいているのであるが、そうした既存の意味の集合態に基づく労働と言う存在に依って新しい意味がシステムの中で産出され、システムはそれを世界へと送ることによって世界を構成する意味連関の中に差異を導入して、それと共にそれへと関わる人間存在の存在形態、あるいは存在運動にも差異を導入する。そのことによって世界を構成する意味の集合態に基づいて形成されているシステムを構成する意味の構造態も差異化されて、労働と言う有り方にも差異が導入されて、労働と言う存在構築の仕方そのものが変化を被る。すなわち労働と言う人間存在の存在運動は、意味を産出することによって世界の形態を変えて、そのことによって労働の形態も変化させるのである。

従って歴史とは人間存在による己れの時間性の行使としての己れの存在の差異化、それに伴う世界の中への差異の導入に基づいて、世界を構成する意味の集合態の連関の変化、その結果生じる人間存在の存在運動の形態変化で

あり、そうしたことに大きく貢献するのが労働であり、労働と言う人間存在の存在運動による意味の産出、それを世界へと定着されることが世界を構成する意味連関の変化に繋がり、人間存在の存在運動の形態変化へと連関して行く。

歴史とは従って世界による意味の自己増殖の歴史であり、それによる人間存在の存在運動の変化の歴史であると言える。そしてそうしたことを齎らすのは労働と言う有り方であり、労働は諸々の意味を産出することによって世界の意味構成態に変化を与え、その結果労働の形態にも変化を齎らすのである。労働の形態の大きな変化はシステムの形態の変化に伴うものであり、システムは世界を構成する意味連関の変化に基づく。つまり大規模なシステムが形成されるためには、そのために必要な有意味的存在者としての機械が必要であろうし、それは労働の結果世界の構成態の一つとなるのである。システムは世界が作ったと言う事も出来る。あるいは労働の形態は世界の歴史的規定であり、それは言い換えるならば世界を構成する意味の集合態に依るのであると言う事が出来る。マルクスが言う様に歴史の段階を幾つかに分ける事は、世界を構成する意味の集合態の形態に依ってであると言う事が出来る。彼の言う支配形態が可能であるのは、その時代の世界を構成する意味の集合態に基づくのであり、それに基づく人間存在の存在運動に依るのであると言える。

「かの古代の社会的生産有機体は、ブルジョア的なそれに比べると、特別にずっと単純であり明瞭である。しかし、それは個々の人間が他の人間との自然的な種族結合の臍の緒をまだ切り取っていない、その未成熟に基づくか、あるいは直接的な支配関係または隷属関係に基づいているのである。これらの諸関係は労働の生産諸力の発展段階が低いということ、これに応じて人間の物質的な生活を作り出す過程の内部における諸関係、従って相互間と自然とに対する諸関係が、狹隘であるということによって、条件付けられている。」²⁷⁾

27) Marx: *Das Kapital, Erster Band, Buch 1*. S. 93.
マルクス『資本論第一巻』104頁。

古代と言う時代においては現代の様に大規模なシステムが確立しておらず、労働と言う有り方を構築する場合も、自然との関わりにおいて自然と存在とが無媒介的に接する事が可能であった。大規模なシステムが確立したのは産業革命以降であり、紡績機械の発明によって大規模な工場が当時のイギリスのあちこちに出来て、それまでの小規模な生産様式から大規模な生産様式へと変わって行き、労働と言う有り方の形態も大きく変化して行った。そのことは労働と言う存在が自然に関わる場合にシステムを介して関わらざるをえなくなったと言う事を意味する。世界における新しい有意味的存在者の産出によって労働と言う存在の形態が大きく変わり、労働と言う有り方と自然との関与は常にシステムを介して為される様になった。あるいは労働と言う存在運動が、つまり世界を差異化して行く仕方、労働者に固有な時間性の行使がシステムによって纂脱されると言う事態が生じて、労働者個々人に代わってシステムが主体となって世界に現われたのである。

産業革命においてスティーヴンソンやジェームス・ワット等が新しい機械を発明することによって、つまり新しい有意味的存在者を世界の中に生み出す事によって、労働の形態は変わり、世界を構成する意味も変わったのであるが、別の拙著で述べた様に、²⁸⁾一人の発明家がそうした新しい有意味的存在者を世界の中に産出したのであるが、それは意味の集合態としての世界と言う観点から見れば、世界が既存の意味集合態を基盤として産出したのである。世界は意味の集合態であり、無数の人間存在による存在の錯綜態であり、そうした存在の錯綜態から新しい有意味的存在者は生まれたのであり、そしてそれが世界を構成する一契機としての人間存在の存在運動の形態を変えたのである。そしてそうした事は労働と言う有り方がシステムを媒介にして、意味を世界へと送り続ける事によって推進されたのである。労働は意味の集合態としての世界によってその有り方を規定されると共に、世界を変えたのであり、また変えつつあるのである。

28) 拙著『意味の現象学』参照。